



「共存できる世界を目指して…」

福井県立藤島高等学校 2年 道上 美璃

「ある日、あなたの学校に難民の子が編入し、あなたの隣の席に座ることになったらどうしますか？」こう問いかけられて、笑顔で応えられる人がどのくらいいるのでしょうか？

春休み、私はあるTV番組に大きな衝撃を受けました。YCE派遣生として、夏休みにマレーシアに1ヵ月間派遣されることが決まっていたので、首都クアラルンプールを題材にしたこの番組に興味を持ったのです。ところが、東南アジア有数の世界都市であるクアラルンプール中心部のインビ地区、そこは私が想像していた近代都市とは全く違う世界でした。そこはミャンマーで迫害を受け、クアラルンプールに逃れてきた多くの人々が寄り添って暮らす場所でした。マレーシアは国際連合の「難民条約」に加入していないため、彼らの住居や教育を保護する制度は整っておらず、頼みの綱は国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が発行する「難民カード」で、このカードがあれば一定の保護を受けることができます。しかし、たとえUNHCRに難民として登録されていても、不法滞在とみなされて警察に拘束されることもあるそうです。インビ地区には第2の人生に希望を託したミャンマー難民がやってくる一方で、ここでの不安定・不自由な状況を脱してより受け入れに寛大な第3国へ再定住を希望する人も少なくない、という内容でした。取材を受けていたサラという16歳の女の子は、アメリカでの定住を希望していました。

私は自分と同年の子が、祖国を追われる壮絶な経験をしていることを知りとても複雑な気持ちでした。そして、派遣先のマレーシアにたくさんの難民が押し寄せていること、更に難民の多くがマレーシアから脱出して新たな場所で自分の将来を切り拓こうとしていることに驚きました。同時に私が暮らす日本は難民を受け入れているのだろうか？という疑問がふつふつと湧いてきました。すぐさま私は、インターネットや文献を通じて難民問題について調べてみました。すると、日本は2010年から第3国定住の受け入れを行っているものの、その数は非常に少なく、「日本で難民認定を受けるのは、宝くじにあたるようなもの」そして「難民に冷たい国」と言われていることを知りました。その理由は、難民認定の非情に厳格な審査に加え、たとえ認定を受けられたとしても、言葉の壁や文化・生活習慣の違い、頼れる親戚がない、外国人を受け入れる体制が整っていないので、日本に定着し、安定した生活をしていくには様々な困難が伴うためです。島国・単一民族国家では、外国人を受け入れることがまだまだ容易ではなかったのかもしれませんが、その事実には私は落胆しました。日本は平和でかつ先進国と言われているのに、どうして困っている人を保護し、支援することが難しいのだろうか…

私は、改めて冒頭の質問を自分自身に問いかけてみました。「その子と話してみたいし、私達の仲間になって欲しい！」それが今の私の思いです。お互いに戸惑うことが多いかもしれませんが、これから同じ社会で暮らせるならば、彼らの経験からたくさんのことを学びたい！と心から思っています。

奇しくも、日本政府は来年2015年からマレーシアに一時滞在するミャンマー難民の受け入れを決定しました。私は、マレーシアに渡ったら、マレーシアの人々ともこの問題について話してみたいです。また、もし他の国へ行くチャンスがあるならば、渡航先の国々でも難民となった人がどの国に逃げているのか、その理由は何か、そういった背景を調べてみたいと思います。私達1人1人がこのように意識を持って行動すれば、日本・世界は変わるのではないのでしょうか。そして、日本が多様性を受け入れて誰にとっても暮らしやすい社会になることを願っています。